

久保 弘毅

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でプレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。

Voice of Handball



人間性と競技力

～加藤夕貴(三重バイオレットアイリス)
の復活、成長の軌跡～

黒柱だった。

プレースタイルはシンプルかつ特徴的だった。1試合10点を取れるロングシュートと、恐ろしくらいに速いポストバスに、パラレル(平行)からの攻めで右バックの1対1を活かす。右バックにアウト割りの得意な宮地令子がいたこともあり、この3つの選択肢だけで、センバツ3連覇を狙った洛北高(京都)を決勝で撃破した。

三重バイオレットアイリスの司令塔・加藤夕貴は、2009年の全国高校選抜大会で名経大市邨高(愛知)が日本一になった時のキャプテンである。得点力のあるセンターで、攻守にチームを支える文字どおりの大黒柱だった。

**自立した選手は
嫌われる?**

3月5日の最終戦で、初の日本リーグ・プレーの行きを決めた三重バイオレットアイリス。司令塔の加藤夕貴が果たした役割は大きかったが、その影には彼女自身の成長があった。

加藤は「選手の自立」を掲げる浅野清隆監督のハンドボールを象徴する存在だった。加藤がつけていた背番号18は、のちに名経大市邨高のエースナンバーとなつた。そのレベルに達していない選手は19番をつけ、浅野監督から「そろそろ18番をつけてもいいんじゃないか?」と認められて、初めて18番を背負う。背番号について質問すると、名経大市邨高の選手からは必ずと言つていいほど「日本一になつた時の加藤先輩」の話が出てくる。

いつも先頭に立つてチームを引っ張り、コート上ではつねにクールなしつかり者。その一方で、自分のことを「夕貴はあ」と話すあどけなさもあった。強烈な個性を持った加藤は、間違ひなくその年代のトップスターだった。



加藤は「選手の自立」を掲げる浅野清隆監督のハンドボールを象徴する存在だった。加藤がつけていた背番号18は、のちに名経大市邨高のエースナンバーとなつた。そのレベルに達していない選手は19番をつけ、浅野監督から「そろそろ18番をつけてもいいんじゃないか?」と認められて、初めて18番を背負う。背番号について質問すると、名経大市邨高の選手からは必ずと言つていいほど「日本一になつた時の加藤先輩」の話が出てくる。

高校時代の恩師である浅野監督は、加藤の性格をこう見ている。「きついポストパスを出す時もある」とあるごとに加藤をかばい続けた。だが最後には「社会に出て、少し痛い目にあつた方がいいかもね」とともにこぼしていた。

早大の脇若正二監督は、加藤のセンスと情熱をだれよりも評価し、「夕貴はあ」という言葉を繰り返して、最後には「社会に出て、少し痛い目にあつた方がいいかもね」とともにこぼしていた。

ハンドボールへの純な気持ちとは人一倍。しかし「ちょっとハンドボールがうまいだけのお姉ちゃん」だったのかもしれない。日本リーグの強豪からの誘いはなく、加藤は三重バイオレットアイリスに進んだ。

三重に入つてからも、加藤はツンとしていた。大学時代に傷ついて、人との距離を取るようになつていたのかもしれない。

そんな加藤に手を差し伸べたのが、抜群のリーダーシップでチーム

櫛田監督と向き合ひ

パラ

ポストの漆畠が指を痛めながら「このパスを捕らないと、夕貴のプレーが死んでしまう」とがんばつて入らなくなつたから、残っているのはパラレルの攻撃と速すぎるポスト

で、指導者からすると少々扱いにくい面がある。自分の考えを持つているから、なんの考え方もない選手とは話が合わないし、合わせる気もない。見ようによつては「和を乱す選手」になつてしまふ。

高校時代の恩師である浅野監督は、加藤の性格をこう見ている。

「きついポストパスを出す時もある」とあるごとに加藤をかばい続けた。

早大の脇若正二監督は、加藤のセンスと情熱をだれよりも評価し、「夕貴はあ」という言葉を繰り返して、最後には「社会に出て、少し痛い目にあつた方がいいかもね」とともにこぼしていた。

最近は私にスーツと近づいてきて『今日もキャッチボールの相手をしてください』とか言うんです。意外とかわいいところもあるんですよ

少し心を開くようになつたものの、コート上の加藤は相変わらずだつた。悪い意味で、高校時代とプレースタイルが変わらない。レベルが上がり、ロングシュートがあまり入らなくなつたから、残っているのはパラレルの攻撃と速すぎるポスト

を支えてきた漆畠美沙（現・三重県立川越高等学校）だつた。漆畠もまた、加藤の才能とハンドボールへの情熱を感じ取っていた。

「みんなは私が夕貴のことばかりひいきしているように感じているかもしれませんけど、チームが強くなるためには夕貴の力が絶対に必要なん

続くと、プレイとそっぽを向いて、その場を立ち去った。

取材する側にとつても「扱いにくい子」だった。

加藤の転機は入団2年目。櫛田亮介監督との出会いが、加藤を変えた。

おつとりとした櫛田監督は、練習中に声を荒げることはほとんどないし、選手と同じ目線に立つてコミュニケーションを取る。しかし「仲間を裏切るような表情や態度は、絶対に出さないでくれ」と言い切る厳格

な一面もある。加藤がたまに見せる表情についても厳しく言及し、加藤が涙を流したこともあつたという。

この件に関して、加藤は多くを語りたがらない。「櫛田監督と向き合はないといけないから…」と、うつむきがちに話すのみである。だが、



櫛田監督(写真)と向き合うことで、
加藤は精神的に成長していった

本気で向き合ってくれる大人に飢えていたのかもしれない。しばらくするうちに、加藤のプレーも性格も目に見えてよくなつていった。

2015年12月の日本選手権で、加藤は絶好調だつた。リズムよくパスを回して、ポストパスにも優しさが感じられた。以前のようにロングだけに依存することなく、アウトベースを割るなど、新しいパターンも見せていた。

ところがアウトを割つてシュートを見舞われた。前十字じん帯断裂、内側側副じん帯断裂、半月板損傷。奇しくも櫛田監督の現役時代のケガと同じ症状だつた。

司令塔を欠いた三重は、年明けの日本リーグで健闘するも、勝点1の差でプレーオフ進出を逃している。

人間的成長

選手生命を左右する大ケガに見舞われても、加藤は努めて明るく振る舞つた。むしろケガをしてからの行動に、彼女の成長を感じられた。

曲がらない左足を椅子の上に置き

ながらも、一生懸命にスコアをつけて、味方に声をかける。女王さま育ちの加藤が、チームのために雑用すらいとわない。その姿を見て、驚きの声をあげる関係者も多かつた。加藤にこのことをたずねると「私の中にも、こんな優しさがあつたんですね」と、いたずらっぽく笑っていた。

人生初の手術を乗り越え、16年9月の日本リーグでコートに戻つてきた。復帰後の初の7mTでは、大胆にループシュートを決めた。「あんな場面でループを打てるのは夕貴ぐらいだよね」と、チームメイトも驚いていた。

「あのループ、どうでしたか?」
復帰を印象づけられましたか?」
そう言って、加藤は笑つていた。
性格は変わつたが、元来の度胸のよさは変わらない。「扱いにくい子」は、えてしてほかの人にはない勝負強さを持つている。それを学校体育の枠に閉じ込めようとすると、持ち味が消えてしまう。かと言つて野放しに

ながらも、一生懸命にスコアをつけて、味方に声をかける。女王さま育ちの加藤が、チームのために雑用すらいとわない。その姿を見て、驚きの声をあげる関係者も多かつた。加藤にこのことをたずねると「私の中にも、こんな優しさがあつたんですね」と、いたずらっぽく笑っていた。

体育の世界が強要する「過剰なまでの謙虚なふり」でもなく、間違つたプロ志向にありがちな「鼻につくような傲慢さ」でもない。糺余曲折を経て、加藤の行動はほどよく落ち着いてきた。

メンタルトレーニングの成果もあるかもしれない。三重は櫛田監督体制になつてから、チーム全体でメンタルトレーニングに取り組んでいる。ウォーミングアップからテンションを上げて、試合中も試合後も悪かつたことを引きずらずに、今やるべきことに焦点を当てる。例えばGKの山根エレナは自分なりの「悪



2016年9月25日、復帰戦の
7mTでループシュートを放つ



いことを忘れるルーティーン」を作つてから、プレーが安定するようになつた。

加藤自身は、メンタルトレーニングにそれほどのめり込んではいなかつた。

「自分は試合前も試合中もクールでいたいんで。周りは『もっと盛り上がるよ』と言うんですけど、昔からの自分のペースがあるから…」

自分のベストを出す方法を知らな

櫛田監督もそのあたりは寛容で、大事な試合の前には「自分なりのベストの持つて行き方でいい。そこは各自に任せるから」と、個々のアプローチを尊重している。

メンタルトレーニングは重要だが、それがすべてになると、悪い意味で宗教化する恐れが出てくる。「信ずる者は救われる」側面もあるが、信じることが思考停止につながると、一見元気そうだけど、判断を他人に委ねた無表情な集団になりかない。

三重は最新のメンタルトレーニングを導入しつつも、思考停止に陥らないバランスをうまく保てている。個を尊重してもらうことで、加藤もまた伸び伸びと自分のよさを發揮できている。「クールでありたい」と言ひながらも、これまでに見せな

い選手にとつて、メンタルトレーニングは大きな助けになる。加藤やボ

スの角南果帆のように、学生時代に優勝経験があつたり、自分のルーティーンを確立している選手は、メンタルトレーニングは補助的な手段ぐらいで構わない。

この試合で加藤は途中出場し、前半は立て続けにミスをしてしまつた。しかし後半に立て直し、角南へのポストパスを3本とおした。縦の2対2からスペースを活用したパスもあれば、3本目はバックパスで観客を沸かせた。

「今日はこういう場に立てたことがうれしすぎて、試合前に1人だけ涙を流していたんです。先に涙を出していたから、勝った瞬間はあまり涙が出ませんでした。

入りのミスは舞い上がつていたから。でも後半は平常心を取り戻しました。前半から(角南)果帆が『もつとポストに(バスを)落としてほしい』と言つていたけど、夕貴がボールを持つとポストとの2対2を読まってしまうから、少し工夫してからバスを落とすようにしました。

バックパスですか。今日はシュー

かつたような屈託のない笑顔で、仲間と打ち解けることが多くなつた。

3月5日、レギュラーシーズンの最終戦。三重はHC名古屋に25ー13で勝利して、日本リーグ加盟11年目で初のプレーオフ進出を果たした。

この試合で加藤は途中出場し、前半は立て続けにミスをしてしまつた。しかし後半に立て直し、角南へのポストパスを3本とおした。縦の2対2からスペースを活用したパスもあれば、3本目はバックパスで観客を沸かせた。

「これ、ウミさん(漆畠のコートネーム)からもらつたリストバンドです。今日もこれを身につけて、いつしょに戦いました。これまでチームを支えてくれた人たちの思いも背負つて、プレーオフは戦いたいですね。まだ勝てるチームになつたとは言えないし、課題もたくさん見つかつたので、プレーオフまでに1つずつ課題を潰していきたいです」

ちょっとハンドボールがうまいだけのお姉ちゃんから、周りを思いやれる真の中心選手になつた。

ただ強くなつたのではなく、そこの人間的な成長があるから、三重は多くの人を巻き込む人気チームになつたのだろう。初期のAKB48のコンセプトではないが、人は、人の成長する姿に共感し、心から声援を送る。